The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スピノザの精神、身体とその変様
Author(s)	中田, 勝也
Citation	カルテシアーナ. 1997, 14, p. 29-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66969
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スピノザの精神、身体とその変様

中田勝也

序

「人間精神とその最高の幸福との認識へと、あたかも手をとってわれわれを導くことのできるもののみが述べられている」と、スピノザによってその冒頭に書き記されてもいる『エチカ』第二部には、一見すると「人間精神」には実質的にそれ自身を知ることができないという事態を肯定するかのような記述が見出される。しかし、もしそうであるならばこのとき「人間精神」はまったく「自己疎外」を被っているということになりはしまいか。また、「人間精神を構成する観念の対象は身体、または現実に存在しているある延長の様態であってそれ以外のいかなるものでもない」(E2P13)ことを考慮するとき、非充全的な「第一種の認識」に関わるとされる「身体 corpus」と「その変様 corporis affectiones」は、「観念」が身体をその対象とするといわれる以上、この「人間精神」の「自己疎外」に資するものとなっていはしまいか。そしてそれならばここにおいて、「人間精神とその最高の幸福との認識へとわれわれを導くことのできるもの」以外のものが述べられていることとなり、このかぎりにおいて『エチカ』はその記述と矛盾する内容をもつこととなって

しまうだろう。しかしここに矛盾はなく、むしろここに矛盾を見出す思考こそが「自己疎外」的であるということが示されねばならない。したがって、「観念」や「精神」とともに「身体」の身分を考察するとともに、いかなる「人間精神」にとっても少なくとも確実なものがあるのであって、それが何であるのかを明らかにしてゆくことが本論においては目指されている。

1　精神の身体による自己疎外？

たとえばスピノザは、「観念」について以下のように定義している。

「観念とは、精神が思惟するものであるがゆえに形成する精神の概念のことである。」(E2D3)

「真の観念はその対象と一致 convenire しなければならぬ。」(E1D6)

また別のところでは、真の観念において「真 verum ということばは、単に観念 idea と観念されたもの ideatum との一致にのみ関係する」(EP60) とも述べられている。したがって「観念」が「真」であるということは、それがその対象と一致しているということ以上のことを表してはいない。ところが別のところでスピノザは、「真の観念（われわれは真の観念をもっているのだから）とはその対象とは異なった或るものである。」(TIE33) として「観念」と「観念の対象」が別物であることを示唆してもいるのである。では、「観念」が真なるものであるかぎり、〈「観念」とその対象とは一致しつつも別のものである〉ということになりはしまいか。それならば「観念」には、いかなる事態が生じているのだろうか。しかしここでは議論を先に進め、とりあえずスピノザによって主張される〈正しい認識の方法〉について、『知性改善論』の記述の一部をきわめて簡単に概観してみたい。

この「方法」とは「観念を獲得した後に真理の標識を求めることにはなく、かえって真理そのもの、事物の想念的本質 essentia objectiva、観念（これらはすべて同じものを意味している）が適当な秩序において求められるための道 via にある」（TIE36）のであり、それはまた「知性の力および能力」、そしてその「本性」と「諸特性」を認識することにあるのである（TIE106, EP37）。しかし一方それは、「事物の原因を理解するための推論それ自体にはないし、ましてや事物の原因を理解すること自体にはなおさらない。むしろこの方法は、真の観念を対象の諸知覚から区別し、この真の観念の本質を探りつつ、真の観念がいかなるものであるかを理解すること」（TIE37）にあるのである。したがってそれは、「対象そのもの」ではなく、その「対象を認識する道」としての「知性の力」、「本性」をこそ目指していると言ってよい。したがってこの「正しい方法」とは以下のようにいわれるだろう。

「方法とは、反省的認識または観念の観念 idea ideae 以外のいかなるものでもない、ということが帰結する。そして最初に観念がなければ観念の観念がないから、最初に観念がなければ方法はありえない。したがって、与えられた真の観念の規範に基づいて精神がどのように導かれるべきかを示す方法が正しい方法である」（TIE38）

つまり、「観念」の「認識対象」はそれを認識する「作用」に先立って与えられているというわけだから、ここには〈真正なる認識のためには、その認識に先立つ様々な手段が必要とされる〉という伝統的な認識の秩序に対する一つの転倒が見出されるといってよい。したがってこの「方法」論は、「真理探求の最上の方法を見出すためにはこの真理探求の方法を探求する他の方法が必要」であり「また第二の方法を探求するめには他の第三の方法が必要」（TIE30）である……という懐疑主義の無限後退を回避しうるという点にまったくその有効性を発揮している。つまりこの方法により、さらに先行する方法のための方法からの切断をその端緒にもってしまうことで真理性が損なわれるといった事態を

真理探求の方法から除外することが可能となるわけである。こうして、「方法」は常に「観念」に先立たれており、つねに後から既に与えられている（はずの）「観念」を反省するべく強いられているのである。

ところで上にみられるかぎり、この「方法」に従うならば「観念の観念」というしかたで「真の観念」の認識へとれわれは導かれることがわかるわけであるが、この「観念の観念」についての記述は、もちろん『エチカ』にもみられる。

「……精神の観念、つまり観念の観念とは実際のところ、観念（その対象との関係を離れて思惟の様態としてみられたかぎりにおける）の形相 forma 以外のいかなるものでもない。」(E2P21S)

よって「観念」を形成するところの「精神」は、自己についての「観念」（つまり観念の観念）を反省的に認識することで「真の観念」を知ることができるということになろう。また「真の観念」について「充全な観念とは、観念が対象との関係を離れてそれ自体で考察されるかぎり、真の観念のあらゆる特質、あるいは内的特徴をもっている観念のことである。」(E2D4) といわれるのだから「精神」は、「充全」な観念により、「真の観念」に導かれうるともいえる。ただし、ここには厳密に条件が付されていることに注意しなければならない。つまり、「観念」が「その対象との関係を離れて思惟の様態としてみられたかぎりにおける」というそれである。したがって今度は、その「観念の対象」がいかなるものかが明かされねばならないだろう。そして「人間精神は人間身体の観念または認識である。」(E2P19D) ともいわれるように、その「観念」の対象とは「身体、または現実に存在しているある延長の様態であってそれ以外のいかなるものでもない」(E2P13)。

いま「身体」に到ることで、われわれはようやくこれまでの議論を整理することが可能となった。そしてそればかりか、「身体」が「観念」の対象である以上、この「身体」こそが実際、「観念」や「精神」をめぐる本論のキーワードと

もなっているのである。先に提出された〈「観念」が真なるものであるかぎり、それとその対象とは一致しつつも別のものであるということはいかなる事態なのか〉という問いは、「身体」とともに以下のように説明される。つまり「観念の秩序および連結は、ものの秩序および連結と同じ」(E2P7) なのだから、「観念の対象である事物」としての「身体」は、「観念が思惟の属性から生じるのと同じ仕方、同じ必然性でもってそれ自身の属性から生じ、あるいは導かれる」(E2P6C)。こうして「観念」と「身体」は、「思惟」と「延長」というそれぞれの属性の下で同じ秩序と連結でもって産出されているのであり、その意味で両者は一致している。したがってこの両者は「同じものであり、それがただ二つの方法で表されているだけ」(E2P7S)、あるいは「それがあるときは思惟の属性のもとで、またあるときは延長の属性のもとで考えられる」(E2P21S) ということなのである。「観念」と「観念の観念」についてもこれと「同様の仕方」で、今度は思惟の属性のうちにおいて説明される (Cf. E2P21)。したがって、ここではいずれにしろ〈一致しつつ別のもの〉であることには矛盾は見出されない。むしろここで問われるべきなのは、〈「観念」はその「対象」たる「身体」との関係を離れることができるのかどうか〉ということである。(1)

もし、「人間精神」によって形成される観念がその対象としているところの「身体」が、現実に存在しないのであるならば何ら問題はない。しかし『エチカ』第二部には以下のように記されている。「個物が観念の属性のなかに含まれているかぎりにおいて存在するばかりか、さらに時間的に持続するともいわれるならば、個物の観念もまた持続するといわれる存在を含むようになる」(E2P8C) のだから、個物の「観念は存在しないものの観念ではない」(E2P11) のである。またさらに第三部では「われわれの身体の存在を排除するような観念は、われわれの精神のうちにあることはできない。むしろそのような観念は、われわれの精神とは相反するもの」(E3P10) とさえもいわれるのである。したがって「人間

精神の現実的有を構成する第一のものは、現実に存在するある個物の観念」(E2P11)、「精神の本質を構成する第一のものは、現実に存在するある個物（身体）の観念」(E3P10D) なのである。こうしてみると、〈「観念」がその「対象」たる「身体」との関係を離れる〉ということは、少なくとも「人間精神」にとっては不可能なことのように思われる。そしてもしそうであるならば、このかぎりにおいて「人間精神」は自身についての充全な認識をなしえないということとなろう。またこのとき、精神についての「観念」、すなわち「観念の観念」もこの事態を免れているというわけではない。というのも、「観念」がその対象としての「身体」との関係を断つことができないかぎり、その両者と同様の仕方で「観念」と合一し、「観念」を反省しているところの「観念の観念」も同様の事態を被らざるをえないからである。

そこで、ここで一旦、「観念」とは所属する属性を異にするところの「身体」を措いて（とはいえ、「観念」が常に「身体」の「観念」である限り、「身体」は常に「観念」に対応したものとして以下の考察の裏面をなすのであるが）、思惟の属性の様態であるところの「観念」の側のみに考察の対象を移してみたい。というのも、一つの「観念」はたしかに「身体」をその対象としつつも、思惟属性の下に産出された諸観念相互の無限連鎖の〈一〉を担ってもいるからである。そこで、「事物が思惟の様態として考えられる間は、全自然の秩序すなわち諸原因の連結は思惟の属性によってのみ説明されなければならない」(E2P7S) のだから、諸観念相互の無限連鎖の〈一〉を担っているところの一「観念」、あるいはそれを「思惟するものであるがゆえに形成する」ところの「精神」の側で、以下しばらく考察をすすめたい。

2　精神の精神によるによる自己疎外？

たとえば「円の観念の形相的有 esse formale は、それの最近原因としてある思惟の他の様態によってのみ知覚され

る、のであり、この思惟の様態はまた他のそれによって知覚され、こうして無限に進む」(E2P7S) といわれるとき、この形相的有を知覚するのはなぜにして当の円の観念ではなく、他の様態のみなのだろうか。この点に関しては、〈あらゆる有限なものが同様に有限なもの（に変様した神）から決定され、この有限なものも同様に……〉という第一部定理二十八が変奏された以下の定理が説明を加えている。「現実に存在する個物の観念は、無限であるかぎりの神を原因とするのではなく、現実に存在する他の個物の観念に変様したかぎりの神を原因とし、この観念もまた他の観念に変様したかぎりの神を原因とし、以下無限に続く」(E2P9)。ところで、スピノザにとって「神はあらゆるものの内在的原因 causa immanens であって超越的原因 causa transiens ではない」(E1P18)、つまり神は結果を自らのうちに産出するのであって、諸結果を自己の外部に産出することでそれら結果と外在的な関係をとり結ぶのではない。したがって「結果の認識は原因の認識に依存し、またこれを含む」(E1A4) といえるわけであり、そしてまた「ある原因の結果が、その原因だけから明晰判明に知覚されうる場合にはこの原因をわたしは充全な原因と呼ぶ。これに反し、ある原因の結果がその原因だけから理解されえない場合には、わたしはそれを非充全なあるいは部分的な原因と呼ぶ」(E3D1) ということにもなるわけである。[2] また「観念の秩序および連結は、原因の秩序および連結と同一」(E2P9D) でもある。

したがっていま、こうした観念の因果の秩序および連結の結果として生じた任意の「一観念」に着目するならば、先の定理九は、次のことを表明しているといえまいか。すなわち、ある個物の観念を知覚するところの「知覚（認識）主体」は、当の観念自身ではなくて、その観念の原因となっているところの現実に存在する他の個物の観念に変様したかぎりの神なのだということであり、また当の個物の観念自身も、もちろんこうした観念連鎖の因果系列上に位置付けられる以上、それは少なくとも自らが結果として生み出した他の個物の観念の原因となるかぎり、すなわちそれ自身に変

様した神たるかぎり他の「観念」についての「知覚（認識）主体」たりうるということである。したがって、結果たる他の個物の観念がその原因たる当の個物の観念だけから明晰判明に知覚されうる場合には、この原因たる当の観念を充全な原因と呼ぶことができるし、結果たる他の個物の観念がその原因たる当の個物の観念だけから理解されえない場合には、それを非充全なあるいは部分的な原因と呼ぶことができる。そこで、個物の「観念」がそれを構成している第一のものとなっているところの「人間精神」にとって、事態は以下のようになる。

「人間精神がこの、またはあのものを知覚するというとき、それは神が無限である限りにおいてではなく、神が人間精神の本性によって説明されるかぎりにおいて、または神が人間精神の本質を構成するかぎりにおいて、神がこのまたはあの観念を持っているということに他ならない。またわれわれが、神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいてのみでなく、神が人間精神と同時に他のものの観念をも持つかぎりにおいて、この、またはあの観念を持つというとき、人間精神がものを部分的にあるいは非充全に知覚するという。」(E2P11C)

たしかに、神が「人間精神と同時に他のものの観念をも持つかぎりにおいて」ある観念を持つならば、「人間精神」は、「結果がその原因だけから理解されえない」ために非充全な原因とみなされ、ものを非充全に知覚することになる。一方、もし神が他のものの観念を持たないで、ただ「人間精神の本性によって説明され」「人間精神の本質を構成するかぎりにおいて」ある観念を持つ場合には、「人間精神」は、「結果がその原因だけから明晰判明に知覚されうる」ような充全な原因となり、ものを充全に知覚することができるということにもなるだろう。ところが、「人間精神」が充全に知覚することができる「もの chose」のうちに、充全な知覚の対象として当の「人間精神」自身が含まれるのかどうかがいま問われているのである。ある個物の観念を認識する「知覚（認識）主体」は、当の個物の観念ではなくて、その「観

念」の原因となっているところの他の個物の観念に変様したかぎりの神なのであって、当の個物の観念自身は、他の個物の観念の原因としてそれ自身に変様した神たるかぎりにおいて「認識主体」となりうる。ということは裏を返せば、この当の観念は、他の個物の観念を結果しうる原因とみなされないかぎり「認識主体」たりえないということである。そうであるならば、〈神が人間精神の本質を構成するかぎり、「人間精神」はものを知覚（認識）することができる〉とはいえ、実際にはこのとき充全に知覚されるのは、充全な原因として「人間精神」を構成している観念自身ではなく、その観念から結果として帰結した観念であるというわけである。さらにまた、後に述べられる論点を先取りするならば、「人間精神」と「身体」との関わりの考察を経ることで理解がより容易なものとなるであろうような記述が存してもいる。つまり最終的に精神の認識は「神が人間精神の本質を構成するかぎりでは神には帰せられない。したがってそのかぎりにおいて、人間精神は自分自身を認識しない」（E2P23D）といわれさえするのである。要するに、〈神が「人間精神」の本質を構成するかぎり、「人間精神」はものを充全に知覚することができる〉はずであるのに、まさに〈神が「人間精神」の本質を構成するかぎりにおいて、「人間精神」は自分自身を認識しない〉ということになってしまうのである。こうして思惟の様態において考察された「人間精神」は、これまでのところ以下のように整理される。それはすなわち〈当の観念を充全に認識するのは、その原因である「他の観念に変様したかぎりの神」であり、当の観念が充全に認識するのはそれから結果として帰結した観念である、という観念の因果の仕組みによって説明され、そして「神が人間精神の本性とともに他の観念を持つ」かぎりにおいては、ものの部分的で非充全な知覚をしか持たず、「神がその本性によって説明される、あるいはその本質を構成する」ときには、そのかぎりにおいて、自分自身を認識しないという「人間精神」〉、要するに〈自己自身の充全な認識からは「疎外」された「人間精神」〉である。

いずれにしても以上のような事態、つまり神によって産出された「観念」連鎖の系列上の任意の「観念」を「認識主体」として措定し、それによる充全な自己認識を問うというかたちで「観念」が自体的に考察されるかぎりにおいて、この「観念」の構成する「人間精神」はそれ自身の充全さを知りえないという事態が生じている。本論の冒頭で仮にいわれた「人間精神」の「自己疎外」はこうした「人間精神」の困難を指していわれているのである。しかし「人間精神」は「神の無限なる知性の一部である」(E2P11C) ことからして、それは充全なる認識の不可能性の標識ではないはずである。そこで、なぜこのような事態が「人間精神」に生じているのかを、スピノザにおける人間精神の構造を解明しつつさらに以下において考察したい。

3　精神の構造

たとえばアルキエのいうように、「精神 âme」とはその「もっともよく知られた性格が、一性 unicité と単純さ simplicité」であるところのものとするならば、とりあえずわれわれは彼とともに「スピノザにおいてはそうではない」といわねばならないだろう。[3] というのも、「人間精神の形相的有を構成する観念は単純ではなく、きわめて多くの観念から組織されている」(E2P15) からである。そしてまた、「精神」のそうした性格を「〈思惟すること〉と〈思惟を思惟すること〉の同一性」としてデカルトの「精神」に認めるアルキエが、その一方で「精神」が単一なものではなく、また「身体」という桎梏から逃れられないという意味においてはデカルトと理論上の相違が認められるスピノザの場合についても、「〈観念〉と〈観念の観念〉の同一性」にもとづくかぎり「デカルトにとってと同様に、精神とは自己について知ることである」としている点にもとりあえず同意しようと思う。しかし反対にわれわれは、彼とともに「実際のとこ

ろ、デカルト哲学とスピノザのそれとの関係を、観念と観念の観念の問題に関して明確にすることは困難である」と主張するわけにはいかない。[4] というのも〈二人の哲学の関係は、「観念の観念」の問題に関してこそ明確化される〉のであり、また〈「観念の観念」の問題こそは二人の哲学の関係によって明確化される〉からである。

上にいわれていることのうちに、既に考察の材料は揃っているといわねばならない。つまり「精神」、「観念」、「観念の観念」、そして「身体」である。そして前節において、これらのごく基本的な概念上の関連を『エチカ』第二部の記述にしたがって確認したわれわれは、いまそれをデカルトの「精神（魂）」・「思惟」と比較することによって事態をよりいっそう明確にすることができるといわねばならない。それは〈個別化された精神の担っている知覚（認識）主体としての意義〉とでも呼べる事柄に関わるものである。

アルキエの論調を考慮するとき、デカルトの「精神（魂）」は「主体的自己」たりえているといえる。つまり「個別的精神（魂）」は「知覚（認識）主体」として、自己自身に充全なる認識作用を遂行しうるからである。一方、既に確認したように「観念」が必然的な諸観念の因果連鎖の系列から抽象されて、自体的に考察されるかぎり、スピノザの「精神」は自己自身の充全な認識をなしえないという性格を有することから、仮定的に「疎外された自己」と呼ばれていたのであった。とはいえ、とりあえずではあったがわれわれはアルキエ同様、「観念の観念」という仕方で〈少なくとも「精神」は反省的に「自己を知る」〉という事態を第一節で容認したのではなかったろうか。けれども、よしんば「観念を反省する観念」、すなわち「観念の観念」により当の「観念」を知ることができるとはいえ、「観念」が、思惟属性の下で産出された諸観念の無限な因果系列から抽象されたものであるかぎり、「観念」は「観念の観念」によって「観念」を超えるなんらかの新たな剰余的部分を付与されるわけではない、というべきであるだろう。というのも、「私は、知るためには

知っていることを知る必要がなく、さらに知っていることを知っているということを知る必要はなおさらない……なぜならば、私が知っていることを知るためには、必然的にまず知らなければならないから」(TIE34) である。つまりこの場合、対象となっている「観念」が諸観念の無限な系列から抽象されるかぎり、「一観念」と「この一観念の観念」の間における「知っていることを知っているということを知っている……」という相互反照の無限遡行に陥ってしまうわけである。したがって、「観念」を「他の思惟の様態がなくてもあることのできるもの」という意味で「第一のもの」とするスピノザにとっては、「観念の観念」によって「観念」を知るという意識的な「観念」把握は、「一観念」が諸観念相互の連関から抽象されて考察されるかぎり、何もなしたことにはならないだろう。つまり、このかぎりにおいてそれは文字通り〈一つ〉の反省的な認識以上のものではないということなのである。

したがって、ここにおいて「精神の精神による自己疎外」と呼ばれた状況を招来したものの一端が示されたと思う。それはつまり、スピノザの「精神」を唯一・単純な「知覚(認識)主体」としての「精神」に置き換えてしまったことに起因しているといってよい。スピノザの「精神」の「認識主体」的な側面についていうならば、それは先にみたようなデカルトのそれ、すなわち「単一・単純な思惟する主体」あるいは「私 ego」のようなものではない。それはいわば、《神によって思惟属性のもとに産出された諸観念相互の無限なる因果連鎖上の〈帰結〉たる(にすぎない)「観念」とこれを反省的認識の対象とする「観念の観念」とから形成されるもの》であるといえる。したがって「精神」が、神によって思惟属性の下に産出された諸観念相互の無限なる因果連鎖から抽象され孤立化してしまった一つの「知覚(認識)主体」としての「観念」によって形成されるかぎり、既にみたように「観念の観念」という仕方でなされる反省的認識によって何ものももたらされないのだから、実際のところこうした「精神」は、第一節で論じられたところの「正しい

認識のための方法」を遂行する権利を奪われているのに等しいのである。

ここでわれわれはこれまでの本論の手続きが、この「方法」を逆方向に遡行するものであることを確認しておきたい。「実際に真の観念を持っている」(TIE33) とされるわれわれがとはいえ、それは単純観念としての「思惟する主体＝私」が自らのうちに持つようなしかたで持っているというわけではない、「手持ちの観念」から始めて「正しい方法」を遂行することで「真の観念」の充全な認識に到るという道筋上で、任意の始点となるべき所与の「手持ちの観念」の素材となるものの方へ、いうならば「正しい方法」の道筋を反対に辿るようにして、これまでの議論は進捗してきた。したがって現時点で、「精神」の「疎外」的状況を止揚してしまって「正しい認識の方向」に寄り添い「方法」に身を任せてしまうわけにはいかないだろう。というのも、われわれはいまだ「手持ちの観念」の素材となるものを吟味しえていないからである。したがって「精神」はいましばらく「疎外」されたままである。

こうした方向で考察を続けるために、第一種の認識を手がかりとしよう。というのも、それは「感覚 sensus を通して、そこなわれ、混乱し、また知性によって秩序づけられることもなくわれわれに示されるさまざまな個物」(E2P40C2) に基づく認識であり、そしてそれが「感覚」に関わる以上、そこにはきわめて混乱した知覚をわれわれに与えると考えられる「身体」のある側面を見出すことができるからである。この「身体」は「観念」の対象であったのであり、そして「人間は精神と身体とからなる」(E2P13C) のだから、したがって《神によって思惟属性の下に産出された諸観念相互の無限なる因果連鎖上の〈帰結〉たる（にすぎない）「観念」とこれを反省的認識の対象とする「観念の観念」から形成されるもの》とともに、「身体」は《神によって延長属性の下に、思惟属性の場合と同じ秩序と連結でもって産出された諸物体相互の無限なる因果連鎖上の〈帰結〉たる（にすぎない）「身体」》として、つまり「観念」・「観念の観念」・「身

体」の三項から説明される「人間」の一項を担うものである。だとすれば、たとえばそれは、少なくとも「知っているためには知っていることを知る必要はない（THE34）」というときの最初の「知っている」という経験のうちに含まれているなにがしかを「精神」に指示しうるものなのではないのだろうか。そうであるならば、「知っている」ことについて、唯一・単純な「精神」が対象的に認識作用を及ぼすという仕方で得られる認識としての「知っていることを知っていること」ではとらえられない、「精神」のある側面を「身体」は照らし出しはしないのだろうか。つまりこの「身体」は、「観念」と「観念の観念」の間の意識的な反省作用の無限反照を逃れるかたちで、それとは別の仕方で精神を規定するものたりえているのではないのだろうか。こうしてようやくわれわれは、第二節以後留保しておいたところの、「精神」の自己疎外がそこに由来を持つとされていたところの「身体」の考察に移ることにする。

4　身体とその変様

前節までにおいて「精神の自己疎外」と仮に呼ばれた事態を考察したわれわれは、〈自己自身の充全な認識からは「疎外」された「人間精神」〉を確認するに至った。では、次には「人間精神」はその対象たる自己の「身体」を充全に認識しうるのかどうかが問われねばならない。しかしこの点については否定的な解答が予測される。というのも既に一節でわれわれは、〈「観念」がその「対象」たる「身体」との関係を離れる〉ということは、少なくとも「人間精神」にとっては不可能なことのように思われ、そうであるならば、このかぎりにおいて「人間精神」は自身についての充全な認識をなしえなくなるだろうことを確認済みだからである。だがいったい「身体」はなにゆえに「人間精神」の充全な認識を妨げるというのだろうか。「身体」が「精神」の自己認識を妨げるのであるとすれば、この点が追究されねばならない。

スピノザによれば、「もし人間精神を構成する観念の対象が身体ならば、その身体のなかには精神によって知覚されないような（あるいはそれについてある観念が精神のなかにないような）ことはまったく生じえないだろう」（E2P12）ということになる。そして実際「人間精神を構成する観念の対象が身体」（E2P12）なのだから、やはり「身体のなかには精神によって知覚されないようなことはまったく生じえない」といえる。そこで「人間精神を構成する観念の対象（身体）のなかで生じるすべてのことは、神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて、……その認識は必然的に精神のなかにあるであろう、つまり精神はそれを知覚する」（E2P12D）のである。つまり、「人間精神」は「身体のなかで生じるすべてのこと」を充全に認識しうるというわけである。しかしそれならば、「人間精神」はその対象たる自己の「身体そのもの」を充全に認識しうるには至らないのだろうか。

残念ながら事態はそのようではない。その理由は「身体の変様 affectio corporis」を手がかりとして述べられる。「人間身体が、外部の物体から変様（刺激）されるあらゆる様式の観念は、人間身体の本性と同時に外部の物体の本性を含まなければならない」（E2P16）。というのもこの「身体の変様」は、刺激する物体とされる物体双方をその原因として持つからである。よって「人間精神」は、「自身の身体の本性とともにきわめて多くの物体の本性を知覚する」（E2P16）のであり、さらに「身体が受ける変様（刺激）の観念によってのみ人間身体を認識し、またそれが存在することを知る」（E2P19）のである。とはいえ、この「人間精神」は、「身体そのもの」を充全に認識しうるわけではない。というのも、人間身体は自己維持のためにきわめて多くの物体を必要とし、そしてその物体によって絶えず再生される（Cf. E2P04）という意味では、「神が、人間精神の本性を構成するかぎりにおいてではなく、きわめて多くの他の観念に変様したかぎりにおいて人間身体の観念を持ち、または人間身体を認識する、すなわち人間精神は人間身体を認識しない」（E2P19D）

とされるからである。さらにまた「人間精神は、人間身体を組織する部分の充全な認識を含んでいない」(E2P24)。というのも、「人間身体は異なった本性を持つきわめて多くの個体（この各個体がまたきわめて複雑な組織からなる）から組織されている」(E2P01) ので、こうした各部分の観念または認識は、それらを結果しえた原因である他の諸個物の観念へと変様した神のうちにあるからである。つまり「人間身体を組織する各部分の認識は、神が人間精神の本性を構成する観念を持つかぎりにおいてではなく、神がきわめて多くのものの観念に変様したかぎりにおいて神のうちにある。したがって人間精神は人間身体を組織する部分の充全な認識を含んでいない」(E2P24D)、つまり人間身体の諸部分の充全な認識をなさないのである。要するにこれらの困難は、「人間精神」が、「身体が受ける変様（刺激）の観念によってのみ人間身体を認識し、またそれが存在することを知る」(E2P19) にもかかわらず、その「身体が受ける変様（刺激）の観念」が、身体およびそのきわめて多くの部分とともに外部の物体をもその原因として持つがゆえに「人間身体そのものの充全な認識を含んでいない」(E2P27) ことに基づく。したがってまた「精神の観念（観念の観念）は、身体の観念と同じ仕方で神のなかに生じる」(E2P20) のだから、〈神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて、人間精神は人間身体を認識しない〉(E2P19D) のと同じ理由で、「身体の変様の観念を知覚するかぎりにおいてのみ、自分自身を認識する」(E2P23) といわれる精神は、〈神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて、人間精神は自分自身を認識しない〉ことになる。つまり「人間身体のあらゆる変様の観念の観念は、人間精神の充全な認識を含んでいない」(E2P29) のである。こうした「人間精神の自己認識の不充全性」は第二節において結論を先取して述べられたが、そこにはこうした理由が存していたわけである。では「人間精神」が「自身の身体の本性とともに知覚する」(E2P16) とされた「きわめて多くの物体」についてはどうかというと、これまた同様の事態を確認するばかりである。「人間精神は、自己の身

体の変様の観念によってのみ、外部の物体を現実に存在するものとして知覚する」(E2P26) のだから、定理十九において身体についていわれたことが今回は外部の物体に適用されているわけだが、これには「身体」の認識の場合と同様に次の定理が制限を加えている。「人間身体のあらゆる変様の観念は、外部の物体の充全な認識を含んでいない」(E2P25)、したがってやはり「人間精神は、外部の物体を充全に認識しない」ことになるだろう。

ここに至ってわれわれは、これまで考察に及んできた「精神の自己疎外」と呼ばれた状況を総括しうると思う。「人間精神」が、単独で、ある結果にとっての充全な原因となることで、充全な認識をなすための必要条件は「神が人間精神の本性によって説明されるかぎりにおいて、または神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて」であった。そしてこの条件下において、「人間精神」のおかれた困難な状況を一括して述べるならば以下のようになる。それはすなわち〈「人間精神」が、自分自身についても、自分の身体そのものまたはその諸部分についても、そして外部の物体についても充全な認識をなしえない〉という、「人間精神の疎外的状況」である。では「人間精神」は実際のところ、この同じ条件下でいったい何を知っているのだろうか。それは何ものをも知りえず、まったき疎外を被っているというのだろうか。

しかし、そうではない。この点に関するスピノザの解答は次のようなものである。

「身体の変様の観念は、神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて神のうちにある。すなわち人間精神はそのような変様を知覚する」(E2P19D)

「身体の変様の観念は人間精神のうちにある。つまりそれは、神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて神のうちにある」(E2P22D)

つまり、自己自身、身体そのもの、その諸部分、そして外部の物体そのものの充全な認識からは「疎外」されていた

ところの「人間精神」も、「神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて」少なくとも「身体の変様」を知ることができるのである。「人間精神を構成する観念の対象（身体）のなかで生じる contingere すべてのことは、神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて、……その認識は必然的に精神のなかにあるであろう」から、「精神はそれを知覚する」（E2P12D）のではなかったか。「身体の変様の観念」は実際、「人間精神」による「身体そのもの」や「外部の物体そのもの」の充全な認識には不適当であるとはいえ、「身体の変様そのもの」の認識が「人間精神」にとってある種の確実性を帯びてなされるのも事実である。というのも、「身体のなかで生じること」は「身体そのもの」とは別物だからである。すなわち前者は「身体のなかに存在する existere, esse 部分的なもの」ではなく、「身体」と「外部の物体」を原因として「身体において生じる contingere こと」なのであり、それは結局「人間身体」が「外部の物体からきわめて多くの仕方で変様（刺激）される affici」（E2A3）といわれる際の「変様」のことだからである。したがって少なくとも、〈神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいて「人間精神」は、「身体」のなかで生じる contingere ことをたしかに知覚する〉といわねばならない。実際、好むと好まざるとに関わらず「われわれは身体の変様の観念を持っている」（E2P13D）。というのも、「われわれはある物体（身体）が多くの仕方で変様されるのを感じる sentire」（E2A4）からである。[5] そしてこれゆえに「人間精神を構成する観念の対象は身体である」（E2P13D）とスピノザは帰結しうるのである。

こうして神が人間精神の本性を構成するかぎりにおける「人間精神」の知覚対象として、少なくともこの「身体の変様」を見出だすことができる。もちろんこのときの「知覚」は文字どおりの「知覚」として「精神」の受動的側面を多く表現するであろうから、「自己疎外」的状況におかれた「人間精神」が確実に知りうるのは、「外部物体と身体自身によって身体が変様されること」だけでしかないといえるかもしれない。したがって「人間身体の変様の観念は、単に人

間精神にのみ関係しているかぎり、明晰判明なものではなく混乱したもの」(E2P28) である。既にみたように、この観念は外部物体ならびに身体とその部分の本性を含んでいるとはいえ、「人間精神」はこれらについての充全な認識を持たないのである。したがって「それの観念が外部の物体をわれわれに現在するものとして表象するところの人間身体の変様は、ものの形を再生しないが、われわれはそれをものの表象像 imago と呼ぶ」し、「精神がこのような仕方で物体を観想するとき、われわれは精神がものを表象する imaginari という」(E2P17S) のであり、またこうした「知性的な秩序に基づかないで、感覚によって損なわれ、混乱した形でわれわれに示される認識」、「漠然たる経験による認識」は「臆見 opinio」「表象 imaginatio」、あるいは「第一種の認識」と呼ばれもするのである (E2P40S2)。しかしそれゆえに、「身体の変様」とその「観念」の存在を確かに教える人間の感覚・知覚能力を必要以上に過小評価するわけにはいかない。というのも、精神は、この「観念」を「知覚するかぎりにおいてのみ、自分自身を認識する」(E2P23) し、この「観念」によるより「他の仕方では、外部の物体を現実に存在するものとしては表象しえない」(E2P26D) のだから、もっとも損なわれ、混乱した精神でさえこの「観念」を確かに持ち、この同じ「観念」を素材として充全な認識を形成してゆくのだからである。したがって「精神の表象はそれ自体においてみれば何らの誤謬も含んでいない」(E2P17S) し、また「観念の中には、それのために観念が虚偽といわれるような積極的なものは何もない」(E2P33) のである。そこで「精神はものを表象するから誤りを犯しているのではなく、ただ精神が自己に現在するものとして表象するものについて、その存在を排除する観念を欠いていると考えられるときにのみ誤りを犯している」(E2P17S) ことになり、反対に「精神が存在しないものを自己に現在するものとして表象するときに、同時にそのものが現実に存在しないことを知っているならば、精神はこの表象する能力を自己の欠点ではなく長所と」(*ibid.*) みなしうるのである。したがって、たとえば太

陽を見るわれわれが「太陽はおよそ二百フィートわれわれから隔たっていると表象する」(*ibid.*)ならば、この表象そのものに誤謬があるわけではない。このとき誤謬は、太陽とわれわれとの実際の距離およびこの表象の原因を知らないことにあるのである。但し、実際の距離や表象の原因を知ろうと知るまいと、太陽がそのように見えることは確かなのであり、そのように見えないわけにはいかない、というのが「身体の変様」の持つ特性である。人が「知っているように知っている savoir comme savoir」ということは、「知っていること」の肯定であり、それが確かだということなのだから、「知っていることと確かさは同義語」である、とするゲルーにしたがうなら、[6] この場合「身体変様の観念」が人間精神のうちにあること、つまり「身体」が変様されるのを、それを「感じる sentire」という仕方で「人間精神」が「知っている」のだから、少なくともこの「感じている身体変様が感じているようにある」ことは確実なことであるといえる。われわれの精神がどれほど「疎外」されていようとも、われわれは「身体変様」を感じており、もちろん既に「感じてしまっている」以上、「私が知っていることを知るためには、必然的にまず知らなければならない」(T1E34) ことからして、私は「感じていることを知っている」。そしてこの「感じているという事実」だけはいかなる精神にとっても確かなことである。われわれはそれを「感じないではいられない」のである。

このとき、「身体の変様」とその「観念」はそれぞれ、その「観念」とその「観念の観念」の対象となっているという意味では、前者は後者によって「観念されるもの ideatum」としての資格を持つ。しかしそれらは、思惟主体たる「人間精神」が思惟作用を遂行した果てに見出だしたところの「思惟されたもの cogitatum」としての資格をも持つわけではないことに注意しよう。スピノザの方法論が教えるところは、「観念」とその対象との一致の確証が認識によって目指されているのではなく、この一致はむしろ始めから常に既に認識の条件をなしているいということである。したがって

この意味においては、「身体の変様」とその「観念」は始めから既に、この上なく「観念されたもの」である。[7] そこでわれわれは、まず最初に「身体の変様」があり、それを対象化することによって次に「観念」が把握し、さらに今度はこの「観念」を「観念の観念」が同様に対象化するかたちで把握するのだといった継起的な事態をここに想定してはならない。これらは、そうした対象化の認識作用の手続きを経ることなくして一挙に人間に与えられねばならないのである。もし「身体の変様」を感じるとすれば、同時に人は自ら「感じることを知っている」し、「感じることを知っていることを知っている」のだから、「身体の変様」と同時にその「観念」とその「観念の観念」がわれわれの精神のうちにあることになるであろうし、実際常に必然的にそれらはあるのである。

こうしてみるならば、さらにわれわれは、「身体が変様されることを感じる」こと、あるいはこの「変様の観念」を持つことの確かさはスピノザにおける「私がある ego sum」を説明するとさえいえるのではないか。「第二答弁」におけるデカルト自身と同様に、[8] 「私は思惟する、ゆえに私はある cogito ergo sum」が大前提の隠された三段論法ではないことを指摘したスピノザは、同命題を「私は思惟しつつある ego sum cogitans」と同義の単一命題として解するのだが（PP/ I 144）、この際の「私は思惟する cogito」は、デカルトとってさまざまな思惟の様態、すなわち「疑うこと、理解すること、肯定すること、……そして感じること sentire」を意味することにスピノザが自覚的である点を考慮するならば（PP/ I 145）、まさにスピノザの「私」は「感じつつある」といえるだろう。もちろん〈cogitans〉のこうした性格を考慮するならば、『エチカ』第二部前半に着目して論を進めてきた本論のように認識の筋道を手持ちの「観念」の方へと遡行する手続きとは反対の方向において、すなわち普遍的概念を形成する方向においてこそ、スピノザにおける〈ego sum cogitans〉の意義が本来見出だされるというべきであるのかもしれない。またスピノザにとって「私がある ego

sum」という際の「私」は、アルキエいうところの「一性」や「単純さ」によって性格づけられた「精神 ame」によってではなく、多くの「観念」によって組織された「精神」から説明されるような「私」である。とはいえ、既述の「身体の変様」とその「観念」の性格に鑑みてそのような「私」ではあっても「感じつつある」こと自体は、決して排除されはしないのである。こうして、認識の始原において「私がある ego sum」ことの確証に自らを素材として提供するといえる「身体の変様」とその「観念」、そしてその「観念の観念」は、もっとも損なわれ、混乱した「精神」にとってさえ確かなものとして、認識の充全・非充全に関わらず、「人間精神」が認識を遂行するための〈究極的素材〉となるものであるといえる。

結び

以上の考察から、感覚・知覚能力というわれわれの感性的側面に基づく「身体の変様」とその「観念」が、〈究極的素材〉として「人間精神」による認識の条件となっていることであらゆる混乱がもたらされるといえる。それらは認識のための必要条件であるにも関わらず、それにのみ基づいて事物を観想するかぎりわれわれの認識は第一種のそれであるしかないというのである。しかしそうとはいえ、もはやわれわれは「人間精神」は「自己疎外」されているわけではないといわねばならない。実際には「人間精神」の真の「自己疎外」は、「観念」の対象たる「身体の変様」を、それがいくら「身体そのもの」あるいは「外部の物体そのもの」の本性を含んでいるとはいえ、これら「そのもの」と混同することで成立する認識に自足することにあるということになる。したがってわれわれは、「身体の変様」あるいはその「観念」をそれ以上でも以下でもなく正しくそれとして評価するために、ゲルーのいうように「観念」と「認識」とを区別

しなければならない。[9] ある「観念」が「精神」のうちにあるからといって、「観念の対象」は、その「観念を通じてわれわれが認識していると思っているものそのもの」に等しいわけではないのである。たしかにもっとも損なわれ、混乱した「精神」はその性格上、一旦はこの混同を必然的に自ら受容しなければならない。しかし「精神」はそうした混同のもたらす認識にとどまることを自らにとって必然的な状況としていつまでも引き受けるわけではない。「観念の中には、それのために観念が虚偽といわれるような積極的なものは何もない」(E2P33) のであって「虚偽とは、非充全なあるいは損なわれ混乱した観念が含む認識の欠乏」(E2P35) にあるのだから、われわれはそれがいかなる「観念」であれこれをを素材として認識を正しく導くことができるというわけである。そこでマトゥロンとともに、「充全な観念」は「われわれの身体の変様のうちにあって、われわれの本性のみによって説明されるところのものの観念」であるということができるだろう。[10] したがっていまだ損なわれ、混乱した「精神」を有するわれわれは、「観念」を通じてあらゆるものをそのものとして認識しえないのだとしても、「身体の変様のうちで、われわれの本性のみによって説明される諸側面が、そこにおいて互いに連結しあっているような論理的秩序」を形成すればよいだろう。[11] そしてこうしたしかたで進められる認識を保証するのは、「人間身体または人間身体をつねに刺激するいくつかの外部の物体に共通でありかつ特有なもの、そして等しくこうした各物体の部分の中にも全体の中にもあるもの」(E2P39) についての認識であり、起源的にはきわめて混乱した知覚をわれわれに与えるところの「身体の変様」を素材として始めることから形成されうる普遍概念でもあるところの「共通概念」なのである。「観念」が個別的にみられ、諸観念相互の無限の観念連鎖から抽象されたものであるかぎりにおいて「個別的人間精神」は仮にも「自己疎外的」と呼ばれうる状況を引き受けていたことをわれわれは確認してきた。では、もし「観念」が諸観念相互の連関から抽象されて考察されない場合はどうなるというのだろうか。

実はこの点にこそ、スピノザにおける「精神」の理解が賭けられているのである。しがって第二節で触れた定理九は、こうした観点から理解されなければならない。任意の個物の「観念」は、「あらゆるものの起成原因（E1P16C2）」であるとともに「第一原因（E1P16C1）」でもあるところの神が変様したところの他の個物の「観念」を原因としてもつかぎり、この他の「観念」がいかなるものであろうとも、当の個物の「観念」が含まれている無限なる観念系列からの断絶および抽象を被るわけではないのである。そこで「人間精神」は、こうした「観念」の因果連鎖のうちに「共通概念」を手がかりとしつつ「正しい認識」を推し進めることが可能となろう。本論においてわれわれは、この認識の筋道を遡行しつつ、もっとも損なわれ混乱した「精神」でさえ、少なくとも「身体の変様の観念を持っている、あるいは身体が変様されていることを知っている」ことの確かさを見出した。最終的には「われわれがなんらかの明晰判明な概念を形成しえないようないかなる身体変様もない」（E5P4）といわれるのだから、この「身体変様」から始めて、われわれはまったき「充全観念」を形成しうるといえる。とはいえ現実的には、無際限的に複雑な構造をなす身体のあらゆる細部を的確に認識することは困難であるともいえよう。[12] だがしかし、身体は少なくとも「できる、能う capable」という能力で以て（マトゥロンの適切な例えでいえば、われわれは円を描く際に、脳神経過程の細部に生ずるであろうあらゆる事象を認知していないにしても、線分の回転という仕方を「実現できる capable d'effectuer」のである）[13]、一連の観念連結を成し遂げているのである。もちろんこうした能力は「能動」のそれであるだろう。しかし、もっとも損なわれ混乱した「人間精神」の場合でさえも、たとえそれが「受動的」なものであれ、少なくとも「身体」は「変様されるという能力」を持しているといわねばなるまい。こうして、いかなる「人間精神」にとっても、「身体が変様される」ことばかりは確かなのであって、こうした「身体変様」の意義を再確認しつつ本論を締め括りたい。

注

スピノザのテクストの引用と参照はゲプハルト版全集 *Spinoza Opera*, im Auftrag derHeidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von Carl Gebhardt, C. Winter, Heidelberg により、以下のように略号化して本文中に示すことにする。E1は『エチカ（ETHICA）』第1部、Pは定理、Dは定義、Aは公理、Poは要請、定理の後のDは証明、Cは系、Sは備考をそれぞれ表す。TIE36は『知性改善論（Tractatus de Intellectus Emendatione）』第三十六節、PPは『デカルトの哲学原理（Renati Descartes Principiorum Philosophiae Pars I. et II.）、EP60は『書簡六十』、を表す。ローマ数字はゲプハルト版全集の巻数を表示し、その後の数字はページ数を表す。ただし参照が容易だと思われるものについては省略した。なお、傍点はすべて筆者による。

(1) われわれはもちろん、第五部・定理二十一以下において「身体に対する関係を離れた精神」が問われていることを自覚している。本論の趣旨は、第二部を中心的テクストとして認識の筋道を十全なものから損なわれたものへと辿る方向にあるゆえ、その点は措いておく。また「観念」が対象との関係を離れて自体的に見られるかぎりの「観念」の形相的側面についても、論旨の都合上しばらく措く。

(2) スピノザは「知覚 perceptus」を受動的、「概念 conceptus」を能動的として区別すると記してはいるが（E2D3 Explicatio）、両者がしばしば混同して用いられていることからわかるように、「知覚する percipere」は広義の「認識する」という意味を実際には担っている。したがってゲルーのように、第二部公理五を根拠として「知覚する percipere」は外的物体の認識にふさわしいとは、実際にはいえまい。注(5)参照。cf. Martial Gueroult, *Spinoza II*, Aubier・Montaigne, 1968, Paris, p. 34, 134.

(3) Cf. Ferdinand Alquié, *Le rationalisme de Spinoza*, PUF, 1991, Paris, p. 206.

(4) Cf. Ferdinand Alquié, *op. cit.*, pp. 271-273.

(5) 「『感覚する sentire』は、ただ私の精神と身体とに関連付けられる」というゲルーの指摘は、この場合には妥当なものであるといえる。cf. Martial Gueroult, *ibid.*

(6) Cf. Martial Gueroult, *op. cit.*, p. 251.

(7) ミズライは、「人間精神が対象＝身体についての観念（意識）である」点から、自著の脚注において「あらゆる意識は何ものかについての意識である」とするフッサールを素朴に想起しているが、「身体」が「観念」にとって外的な、いわゆる志向的な認識対象であるといった事態をその名とともに想起しているのだとすれば、彼の指摘は不十分であるといわねばならない。「身体」は「観念」にとって、志向的な対象認識とは別の仕方で知られるというのがわれわれの主張である。cf. Robert Misrahi, *Le corps et l'esprit dans la philosophie de Spinoza*, 1992, Les empecheurs de penser en rond, p. 63.

(8) Cf. R. Descartes, *Œuvres de Descartes*, Adam & Tannery, Vrin, 1964-74, Paris, VII, pp. 140-141.

(9) Cf. Martial Gueroult, *op. cit.*, pp. 269-270.

(10) Cf. Alexandre Matheron, La vie éternelle et le corps selon Spinoza dans *Revue Philosophique*, 119e année tom CLXXXVI, 1994, Paris, p. 29.

(11) *ibid.*

(12) 現実存在する諸個体は「複合物体 corpus compositum」としてあり、したがってそれらは具体的な物理学の対象であるのに対し、「最単純物体 corpora simplicissima」は抽象的物理学の対象となるとするゲルーの指摘は示唆的である。マシュレも同様の主張をしている。cf. Martial Gueroult, *op. cit.*, pp. 156-157. cf. Pierre Macherey, *Hegel ou Spinoza*, La Decouverte, 1990, Paris, pp. 116-117.

(13) Cf. Alexandre Matheron, *op. cit.*, p. 30

（博士課程学生）